

負丈雜記

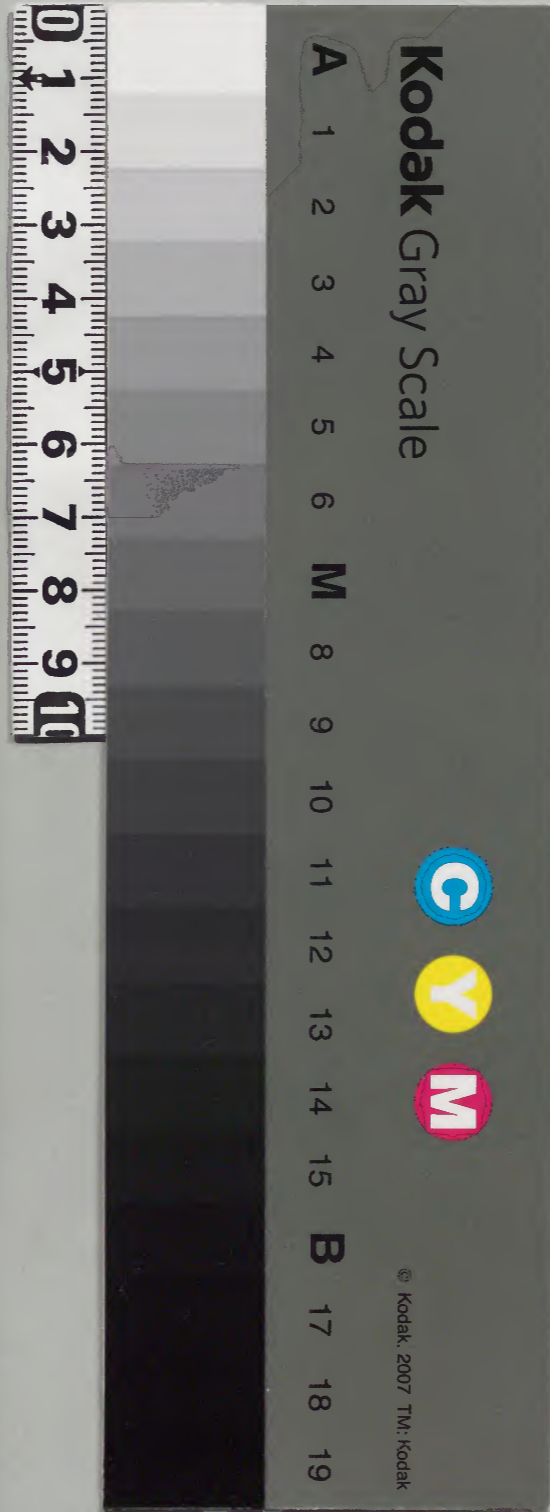
弓矢

九

和書門			
二〇七八一	六八〇一	一六八〇	一六八〇
類	函	架	冊

内閣文庫			
二〇七八一	一六八〇	一六八〇	一六八〇
和書	冊	架	冊

内閣文庫	
番號	和 20781
冊數	16 ( 9 )
函號	153 278



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

雜記第九

弓矢部

花廼家文庫

淺草文庫

雜記才九

伴勢平之自實記



弓矢之部

は初めハ弓と矢の事ナリ記ス迄ハ弓ハ矢ハナクハ

たりしと云事万葉集のあはし部執の棒のらと云事  
ゆへとらしと云事と云事古ハとらしと云事を

後ハたふしと云ことたと云音通ナラズ又古ハ執の字  
を用てさふしと云みたるを後ハ多羅枝と書之と云

後成恩寺殿通旨のあはしと云事根源と云事ハ

弓を所ふと云事天竺の國多羅葉ハその長ク七尺  
ありけ後あやまりと翻譯名義集と云書あり天竺の

事をあたる書くその書は貝多羅樹といふ木は椽櫓の如く  
ゆるく曲りしきなり長八九十尺花は粟の如くある人の云  
多羅羅樹と云ハハチ七尺と云一尺とハ七尺を云ふれハ七尺ハ半  
九尺とあり七尺ありと云事いふんえハ多羅羅樹の事を  
弓の事は云合せていふハハ出家の云出たる事ありし  
たといひハ四祀よりとも如物ノ事ハ用難し弓矢を  
調度と云事調度といは具の事也弓矢ハ武家身一の  
道具あるゆへ弓矢を調度と云也後世も及く近代禮  
を兵具の身一と一書禮を言名とすよりより禮の  
事をなすこと云同ハ心ハ調度無の役と云も弓矢を  
持つ役といは事ハ役名の神記  
一 矢をてうつともてうしと云犬追物の書は公言様ゆ

犬は能時ゆ矢の事をゆてうつともゆてうしとも云事ハ  
たりてうつともと云と調度也とつと五音返すてりしと云ハ  
てうつともと云詞のむじことと調度と云ハ弓矢の物名をれとも  
貴人のゆり矢をこけていふ時ハ弓をゆりしといひ  
矢をゆてうつともと云事古の風俗也

一 矢ぬらげをがくと云ハおもこの木のおゆりてゆてこくを  
云也椽の木乃皮もてまぐハあやまり也ハ事書札雑  
箋書よりうり檀の木此あ皮もて羽の上を巻也  
一 矢の根はけんちりと云抽あり根の先を鋌の如く三角  
はちりる也書札雑箋書云けんちりをらんさきとハ  
ハクト云ニヨリ  
テカハサクラ  
ヲ云カケ  
タル也  
椽の皮もてハクニテラス

ゆきちよつんりおひ 征矢といふひらよさす 征矢初矢といふひら  
てはりりまき  
よさすひらり

一 十六矢よさうり矢をいさくぬ一廿五矢の時いさくぬ二廿六の  
肉を二面のけてとより矢をさし流して廿七と  
書れ新く書書有是るとより矢一矢の事初矢と云  
一 矢を糸をよするようらむ事いはたより糸布をよむ  
右より糸をよむと云く一小笠原流并多賀守後守ハハ  
て記換秘事と云り獲物之記と云く

復更多々  
二つり三つ  
細シ  
廿二寸  
廿三寸  
廿四寸  
廿五寸  
廿六寸  
廿七寸  
廿八寸  
廿九寸  
三十寸

幕目の木ハ朴の木也桐の木ハ畧也柗反用之  
幕目の長サハ大五四寸也柗と云るの活きハ大ひき目  
らのよらと云ハ小幕目を用ゆらすらのハ丸みのを  
さハ長サと陸のしたとハ長サと丸の上のと云

キハ五寸まはり也上の方よりふとまきふまきと云を付て  
少丸とあら物と正る也目の殺ハまとすると云ら五と目とハ  
何の事と委細と云らく柗ハ射自具且秘傳とあり

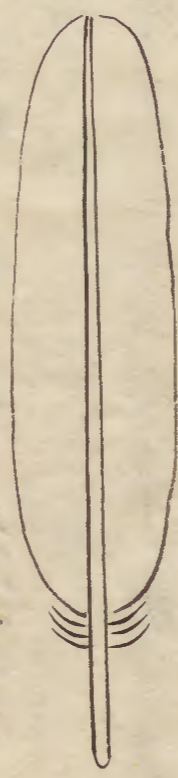
東抄ハ  
引目の字ヲ  
用庭訓往  
来ニ幕目  
字ヲ用ユ皆  
能リ字シ  
枕目ト書ル  
モアリ

一 一回記ハ幕目とも引目とも書らり貞徳云ひきめとハハ  
び目ト云らると目ハ引入てひくたとひきめと云事  
を畧してひきめと云と云はれハ畧目と云らる事布字  
をれ去ひきめと云親ト陸ト幕目とも引目とも字を付  
たと幕目の字引の字ヲたいまれも子細もありて後ハ幕  
目の花ハ音幕のありく勢ハひらゆとハ花つくらとも云又  
幕目の花ハ柗能く柗をらる物と幕目とハ柗ハ魔生の  
物を射ル友ハ若付ると云ハ幕目の字ヲ付て柗ト後  
を作り出しらる物と幕目ハ元来魔生の物を射ル



を少石打と云ふ二の羽を大石打と云ふ一の羽と見よ  
 石打の征矢と云ふは羽多てをきくも征矢の事と云ふ羽は  
 と云ふよりくおと云ふ羽ハ軍陣より云ふ一き名あるゆ  
 大将の矢をハ石打ゆきくをく切符字ハ符の色を云  
 又切符字との符の字ハ父の字と云ふハ羽の摸取の  
 さゆり何と云ふ符の字はよろしき  
 羽の字た記

雪白 エキシロ



黒片羽 カツハ



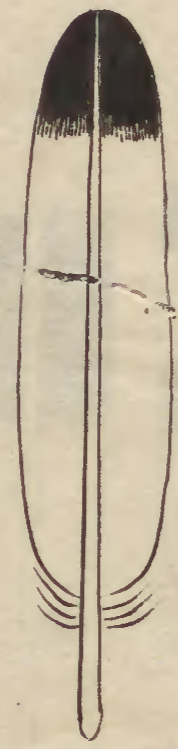
本黒 モトクロ



本白 モトシロ



妻黒



妻白



中<sup>ナカ</sup>白

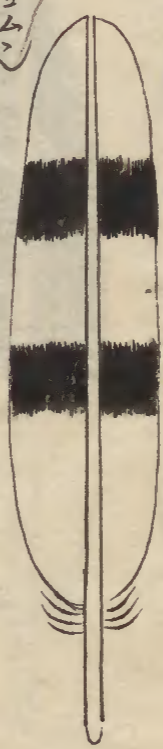


中<sup>ナカ</sup>黒



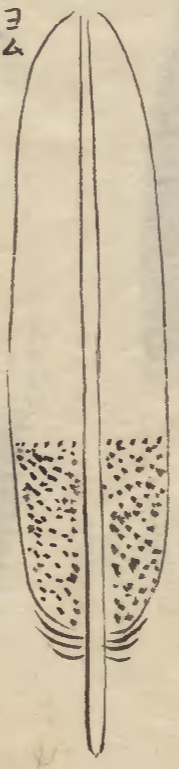
切文

キリフトヨム

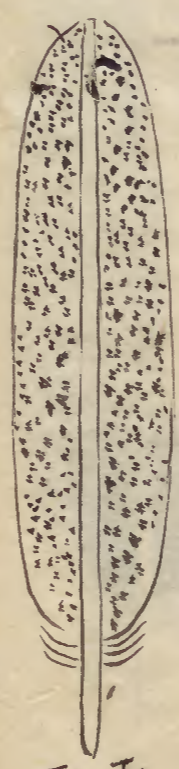


うす<sup>ウス</sup>お

ウスベウトヨム



うす<sup>ウス</sup>を



霞尾又  
霞文書

右真羽の鳥也是方方通用の羽也此并標之の文留り  
ありし志羽の繪別し一卷昔より傳來あり

又護水名  
と云又方日  
トモ云々  
俗梅有勢  
トモ云々  
ニてむんと  
云々

一 一すべりト云ハハおすめをえおすめ名と云名の羽は  
似たる取おすめをト云也おすめをといひあやまり  
うすべりト云ハハおすめ名とハ護田名之事之源平並  
唐記ハ護田名尾ト書てうすべりトよむハ倭名抄ハ故  
一名澤<sup>タリ</sup>庚<sup>ガ</sup>即ち護田名ハ倭名於酒賣止里とありおす  
めととりハ関東にてハミカクと云又ミカクと云ありと云  
田の名はよ居てハ魚名と喰名と立位<sup>タテ</sup>等と似る名  
一 一矢と云ハ管を灸管として羽ハ踏の才二の羽と云  
根ハ木ゆき作らまきと云矢の如し矢ハ三千三万堂の通

通シ矢ト云事近代よりハ信流の弓の原匠の物と云矢の極細ガ遠くハ













付く巻の後ハ細字の後をみよつけまやうううめ  
時をぬぐひきくまうし後の巻殺たのめ(重後  
も本志げ後もぬりこめ後も下地のこしり之換ハ同事之  
右の如く下地をすれハる後ハ通てもうくさりすあべ  
あれさるあり)

一重後の後の巻殺の事三京あり先ハ皇系家よハ  
みきりより下ハ廿八の巻もみきり草巻九巻又ハ  
七巻もまに由ハ張らの島四足らト云つんより三平六ハ  
地の三平六高ゆくとより廿八ハ天の廿八高よかことり  
りきり皮九巻七巻ハ九曜七曜の星もかことりあり  
又仁田右馬助の伝神八みきり上廿八ハみきり下ハ  
三平六新巻を巻未まも志地の神り巻もま

貞丈云重  
後のらハ軍  
陣より後  
雨露ハ遊  
本竹のた  
ちれぬ所  
る巻を遊  
く巻く  
志げ後と  
まにこれ  
後の教志  
げくまき  
よこれハ  
よみきり  
よ巻をハ  
を法ある  
廿八三平六  
あくとま  
いふ共六高  
三平六高を  
よこれハ  
とらされハ  
記の事ハ  
後ハ事あり  
云事三ハあり

てみきり皮のりよ志條明王の神八文をうすやりの  
紙も書て巻其出を志地の神り巻も上を草巻  
めくみきりをすあめ巻又草巻もくも巻くま  
草ハ平人の儀也と射四方儀の書よつんより草巻ハ  
右軍家由用之平巻とい大名の事ハ方方志ハ射  
く平人と云く也又南家の伝あり右馬助実ハ  
曰重後のらと云も能よそありこまめあり後を  
白くはくく後の中ハ一寸半あるをある半尺を  
廿八三平六はくくハ一方のかく後ハはくハはくハ  
あ云みきり上十九ハみきり下九ハ高廿八ハ後  
を巻て廿八高ゆかことり後の巻ハる長一寸余後ハ  
とらされハ記の事ハ後ハ事あり云事三ハあり



つめて後の上をうる一めくぬりこめいさこぬ  
上下のうらうら後と矢すり後をいぬらす白くして  
*ぬりこめ後ハせんいんすすせりふら後をきましくあり*  
至る三不後之せき強をいぬ

軍陣  
使去

武の弓の強

ハ巻強之

巻強ハ常

強ノ上ヲ麻

ニテ本カノ柄

ヲ巻やく

チカハテ巻

ラセきつる

ト云又アセ

オクすもあ

リそれし

マキつると

云それハ

略也

巻強ハ

略也

略也

略也

略也

略也

略也

略也

略也

略也

略也

一 ぬり強とせき強とい別之ぬりつるハ常の強をその

のぬり弓は掛る之せき強と云ハ強ゆくをそのを引

て指糸あう巻て柄強を引くをそのをうる一よそ

ぬり志あめせき強と云ハ射志あたる強をせきつる

ゆり志このびちみあうよ中世射志あたるあ

てハセくす一とと射物記はあり射志あたるとい

射あはししと云事之せき強ハ軍陣中用く

一 弓三ちち二カと云る物取の部ハ記ス

一 弓二ぬり二と云る事其ハ物取の部ハ記ス

一 矢く弓の事弓よ矢を矢く時矢の尚にあ折新

を射てそれを矢をきけて射る矢は矢にせぬる

矢は矢の中ゆいなることあり軍中ハ

用んぬるハ矢の矢の矢は矢く弓あり福物

と名射る軍陣中用んぬることあり

一 神代の弓矢天鹿見弓又天真迦弓天梶弓天羽弓

又天羽矢天加久矢あま名あり神代家の後ま

ちくゆりて定の儀あり神代のもハ知れぬる

皆推考の儀ありあれハ用難し知れぬるハ

すくぬるハ

- 一 古初ゆよある弓ハ 檮弓 檀弓 槻弓 拖弓 柘弓 栲弓



上吉のらハ竹ヲ合セ久皆丸木のらハ木を丸ク削リテ作ル也

云名をらハ作りたる木の名を以て云之別れ多きの  
諸流ありとも皆推考の流之用かこし上古のらハ  
竹を用ひたりしと

一 弓も過ト云事卯竹也とも内竹也とも一方のふ一の弓  
ニツあるを嫌あることらる秘流ゆつんといふ是ハ  
こととハ内竹のふ一あひま内竹のふ一ニツあるを云  
いも事之常のらハ卯竹のふ一名ハ内竹のふ一ツ  
あると

一 ナ張らんとし重後●ゆあこの名を付しる重後を十  
張張弓ゆしる書あり(近代の人の作之用く)古  
書ハ尺ノ下ら名昔●ケ換の事ハまろくありあり也  
一 せき弦の事換物●記日置流法要録抄何れも是利反  
時代の事

のありむきの強を糸ゆく巻うる一ゆくゆる事を  
せくと云之志あめせ平に流の事前ゆ志多すゆ  
又古の仲智も冥と云あゆく作り出す弦を関弦  
といひ坂の下といふあゆく作り出す弦を坂弦と  
云らる事あり北畠教具人の記二条兼良公の尺素  
往來ありよんえたり是ホハ名物あるゆへにその名  
をよんて云之関と云あゆく作りし弦も白弦  
もあつしせきしたる弦もあつし坂弦と云ひし  
そゆくある一せきしたる弦のせきと云詞ハ弦のこ  
らハ換也冥と云所の名を以ていふゆりあふび弦を  
せくと云詞のせくハあせくハ也弦ハ絹糸を巻て  
ひひりめのゆいづるをこせきなるを換りぬれてよらる

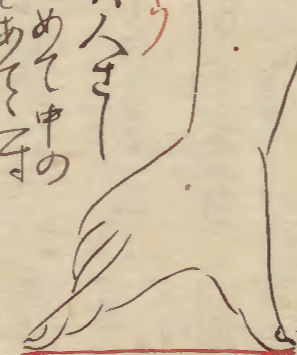
夜うほしめてぬりくる面影をふせくつくされと  
御強と書之御の字ハふせくと云字之又閑強とも  
去くはらの閑と云ふより出る強をいふ

首ハ  
あぶら  
弓を引て  
ツラ後ニテ  
老てクサヒ  
おてくす  
サレハ後ニテ  
いと云ハ巻  
いとつら後  
をとききえ  
一タレニ  
まのゆい  
古白くら  
てま  
又老僂  
もを

一 ぶぢりまあーの弓と云ハ弓師弓を打くいまし  
けつりくそをさしてをずも切らす四角あ  
まをさちまあーの弓と云くまちまあーの弓も  
進物もする物く弓極元云まちまあーの弓もさ  
弓のこくく無口目いぬハ何強と曰前八朝ハ大内  
公方物くあ中強進上につる十張くあさめてゆひは進  
上別よりくく扱ハあるましくい

一 弓の長サ七尺五寸と云事 五尺大五尺云弓ハ  
其也サをあすし定めて天をとるこはくしてゆひまお  
のすをととりや一尺のこくく一尺を

右用抄云矢つらり初に案上の秘事也老若兼よそ人のまをて弓初七尺五  
尺ハ十二束也未法ニハ知ラズシテ一うは定テ七八寸ト云カハあまのま  
又云右流弓の  
ホコタケノ  
そまの指も以テ  
七八寸より寸法をマ  
同シ  
一 寸とりあかんさ  
ゆびをかめて中の  
あらのちをあてて  
と定まらり



おのがをうをとりと云  
用害記云弓の寸  
根ハ七八寸但  
初ハ人の好く  
大ゆびくさゆひをのますを  
まろくをあすとするく大ゆひの  
くさゆひの取まてをあすと極  
ツヨクユビをヒラカ  
瓦ヤカニユビをヒラク

一 弓のゆきりを定る事射のちゆき云弓のゆきりのを宗  
右の乳のりゆりともすをあてたのゆをのてを極く  
あをゆきりてを宗を巻くくすハ不定と云ヤ人  
より弓のゆきりかきもあるし









ちやうくく

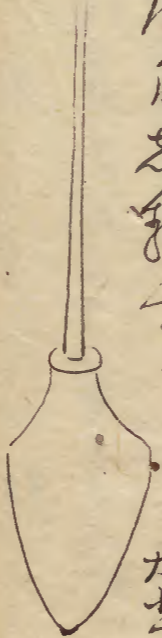


先モ四角ニテ  
タイラシ

ちやうくくハ定角と書ク是も換りて四角ヲ作之四月  
神政あるの代りハ射之をさるの教也

一書れ難くは書よ少者より少くをを母も三寸も中

遊記集  
ちやうくくハ  
とアリ  
とアリ  
とアリ  
節用集  
蝶尾  
矢根ニト  
ス  
もさす  
志のあともさす  
さす  
軍陣ハ志ん  
ちやうくくのうあともさす  
ありけちやうくくと云ハちやうくのなをとりさす  
泥籟の尾と云事之と鏃鋒因彙よりさす  
たれ志れす  
大カアリ  
心ヲ祈

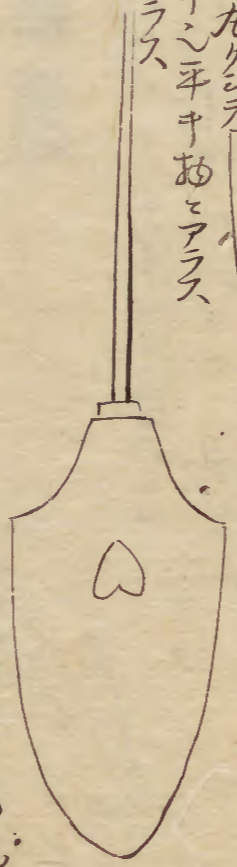


大カアリ

心ヲ祈

志やいのを

貞丈云是ハ丸クシテ  
キホウノルイニ平チおミアス  
刃ノアル抽ミアス  
務也



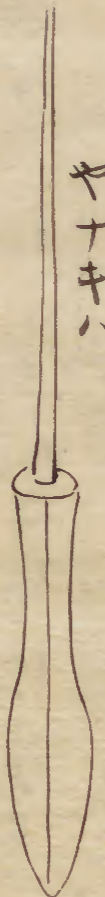
平根  
心ヲ祈

戦前のうらうらい様ト云ふも  
いふはすくくの花をさす  
戦前のうらうらい様ト云ふも

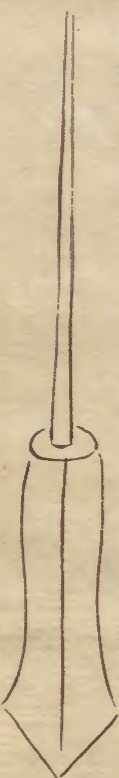


一ヤノハ

お中この花を  
やあ中し花をハ  
形也



ヤナキバ



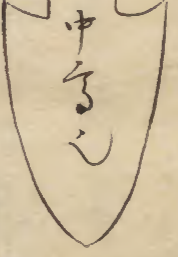
けん志り

けん志りト云  
ふもあらし

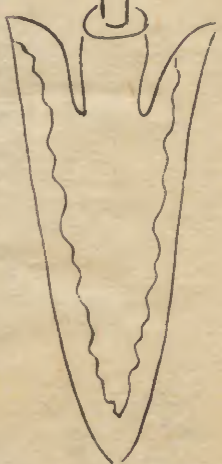
ワタクリト。トカリ矢一物ヲアラス

トカリ矢

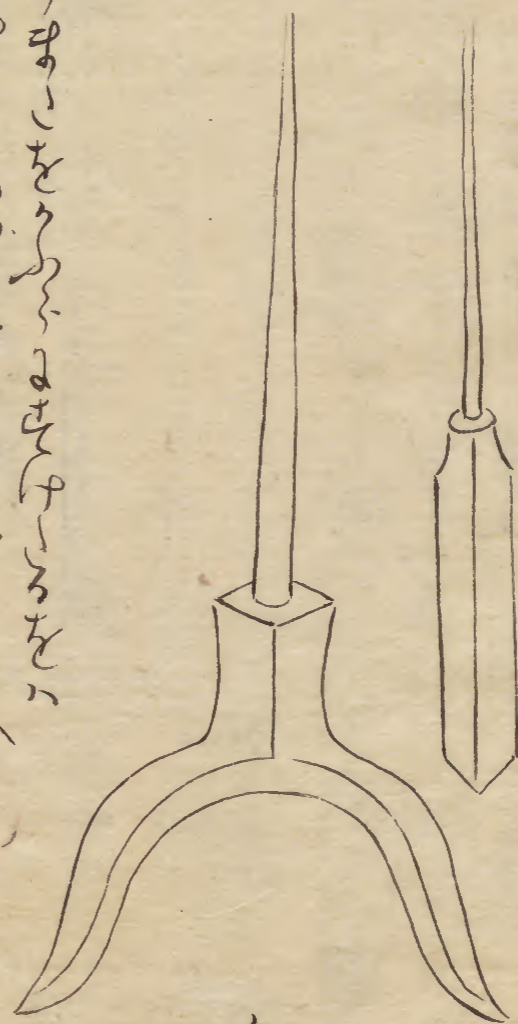
スカシナシ



是もけんちりて



脇縁  
こしり



雁候  
うりま

うりまをうりまはさしやうを  
うりまをうりまはさしやうを  
うりまをうりまはさしやうを  
うりまをうりまはさしやうを  
うりまをうりまはさしやうを  
うりまをうりまはさしやうを  
うりまをうりまはさしやうを  
うりまをうりまはさしやうを  
うりまをうりまはさしやうを  
うりまをうりまはさしやうを



矢ツカ巻

子タメキ

うらや

うらや

是に  
イメト云  
け下

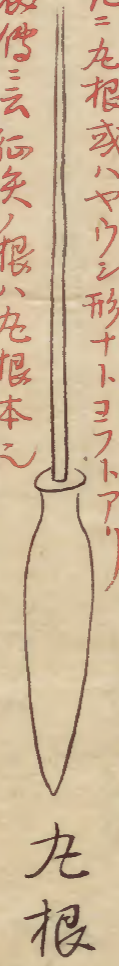
ぬいめの  
うりまを  
はさしやう

矢ツカ巻  
この角も又あめの根うりまも作らるる猪の目  
を三毛はさしやうと流福馬をと射るはうりまを  
はさしやうと射るはうりまを  
はさしやうと射るはうりまを  
はさしやうと射るはうりまを  
はさしやうと射るはうりまを  
はさしやうと射るはうりまを  
はさしやうと射るはうりまを  
はさしやうと射るはうりまを  
はさしやうと射るはうりまを  
はさしやうと射るはうりまを





一 うつ不の矢のさし根の字は書れ難くはの書きあり  
 一 矢ひさよ矢のさし根の字は獨りあり  
 一 まちをさし根よりひきくると云詞あり射の詞は日置  
 流射的書の分は分のおまちをさし根よりひきけて他意  
 あき了我あしりりやせんトアリけ守のふろ情をさし  
 的をさ物よりしてまちをたのこまよりひきけて他意あ  
 福らしいさすして射にあしるるもさし根よりひきける  
 事糸考保え物納より能ある節為射の矢のさし根  
 一 一さるふよ矢の根は楯破る名もさし根よりひきける  
 せまちをさし根よりひきけるはさし根よりひきけるはさし根  
 の本のさし根よりひきけるはさし根よりひきけるはさし根  
 まちと云はし待の字をさし根よりひきけるはさし根  
 乃と云はし武具の記は記はさし根よりひきけるはさし根  
 丸根と云はし丸根の記は記はさし根よりひきけるはさし根  
 さいしてお丸みをけるはさし根よりひきけるはさし根



丸根

細川玄方乃馬堂書云丸根ハ今ノ人ヤウシカタトサス根也トス  
 伊勢幸三ノ記ニ丸根或ハヤウシカタトサス根也トス  
 射年具足叙傳ニ云征矢ノ根ハ丸根本ニ  
 家中休云云ツツホニ矢サスハ征矢ヲサス杖筥ハ畧多也根ハ丸根揚枝形也叙傳モ空物ニ  
 サスニ不サスニ

一 弓の舌ト云根も柳葉の形のこと一弓の舌の形に申すこと  
 をきて柳葉の形に丸根よりハ平中ニ



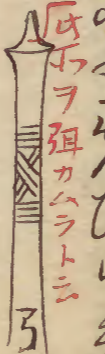


今この寸めて弓の長サゆと矢の長サゆの定まぬを  
今この大少ゆ偽る弓矢の大小長短お應ふべきは  
上古の弓の今の世まで残り傳りしをす大何れと  
同一かふぬい古くをまこの大小同一くさりしゆ  
法三位定保人のちれし神代抄と云ふは神代の弓  
の長サハを平大あたし人代は及て夫をまかりして七  
尺五寸と定る神代の矢ハ五尺あるを人代は八寸五  
寸にして此大寸と定るより一尺二寸は矢は短ハみより  
仙都一尺五寸後よりあやまうし神代抄の流用を  
事あるれ醫者の漢点をあらずは病人の指の寸  
をとりにてそれを灸ふよりあてずをとりにて寸を  
あつをを同寸と云ふ大ある人も小中ををの指  
の寸を用ふなそのあつの大小お應ふべきは出兼る事  
弓矢の寸尺の定も右の同寸すも同一くは我々の寸と  
定る所の事とも皆秘事也。

一 保体矢と云右東鑑よりさう雁侯の矢の事之弓馬故矢  
の書<sup>ニ云</sup>世かりまことと斗りいかにあつて寸の  
い少なり一さ事くそ

一 少弓と云物次第よりあつて揚らあるのめくたまふれ  
ゆて控ひ物之延長五年に月内裏より少弓の物屋あ  
りし由吉乃著芳系よりあり兼久二年其日此の鑑倉  
大宮令禪門の書より少弓の舎ありし由東鑑よりあり云  
真法平の庭訓継事より揚ら者あらとあり雀少らと  
生する雀を系よりくりにはりて少弓矢を射あて

たる者雀をえたるたよふれ之道世近田舎よりありしとぞ  
 一 徇矢ハ軍陣の矢之款を徇討する矢ある夜徇矢と書し  
 是ハ雅も知るるの徇矢と書してそやと云ふけハ知る  
 人あり 貞丈書するそやと云名ハをびる矢ト云を  
 畧してそやと云ふてしそひるハ背の事と徇矢トハ  
 畧者ナリ  
 スクナル矢ハ 心腹の事ト云ふ物ありハ之日本紀神代卷ノ  
 ナル云々ト云フ、ヒルメノミコト 天照大神のソビラ  
 云スヤウ初 大日靈尊 背ハ千葉の鞆と云百葉の鞆を  
 將シテ  
 ソヤナリキ 肩ハ多ク 鞆トハ後之款之神代ナリ  
 貞丈云ハ 徇矢をて背ハ物之背矢と書してそのとよむ  
 洗基ヨシ ソヒラヤ  
 セ矢ト云 ヨリモニヤ  
 レリ



一 彈根と云ハ弓の彈の根の弦のわらひの少先ひらキ  
 ありしをそををすうむと云ふ  
 本ハ 一 年ノ名ハ之物多ク近世年成をを作りてそれを  
 はずくむりト云ハあり 強リ之弓のすすハ成成ハ  
 めくありと云ハありハト云海草の根を云ハ又野草ハかがりト云ぬを  
 根ハニテ老キぬ根を老成するありハト云  
 年ノ物ハ之を云ハくむと云事ハ又ひらきと云ふ  
 云法を物ハ云鷹の羽を云ハ換ハヒを云ハくむを  
 羽ハ之りもくし白キ符の也云  
 古ハ白キ物ノ名トハ  
 二ハヒサゴ花ト云ハ  
 海草ノ名表ハ  
 卷ニテ石橋合我  
 系ニトカシガヤリ先  
 馬ハ白ノ七寸ニ余リテ  
 皇代先ヒサゴ  
 ノ花ノ如ク 鷹の羽のみハ限らず其羽也 符を切りし羽を  
 白カリケレハ若ラユウカホト云トアリ



此器用書記云々ナリ









竹トホリ  
合セ先ヲミ  
ツクサリナシ  
ツクヲ折ス  
ルヲ折  
ルナリ  
左木ヲハ  
ツクヲ折テ  
モヨクニ  
ナラズ

たる秘あるをたの旨は折るけの又曰書は根のほく折る  
ろのそりするをを帆柱をあてきりくといふなりあり  
皆折折を折るをを又一説はろの弾のろをほく  
とのち源平盛衰記上下の弾は角入したるを後のろ  
折てとあるはうもす布をすを象牙ををををを  
たるを云え是れ折折のろよりあるは弾のろをほくと  
あるは非之或人の説は太平記は根のほくとあるは公家方  
あては道隆の官人の折つろのやく根をほてうもす布  
もすををりもえといひは後述之根のほく折る  
と云折の字はよんをほてふといひ折と云詞を折折の  
事を知へし又弾のろを執といひあるは古書なるをて見  
ざる事之板の盛衰記上下ノ弾ト云弾ノ字は  
とあるは折折のろを事すまされあり  
シコカニ

一 矢の管よりすすといふ其のろも管にこれに是竹の年  
を産すといふ竹を云ていふしきなり

八枚夜討、  
条云武者  
又道セテ  
各ノリを  
河内国後  
各ハ別置  
八節トハ  
我々  
格の上ニテ射  
残せん中利  
節コニテリ  
云々

神通のろも矢と云は上さのろも矢の事と云ら云  
能云神通の編をを先も用え上矢のろも根はぬく  
石俵本を赤漆はぬえし是ハ徳宗の宇佐八幡まで  
天子の格にハ矢なれいとして紫の糸を巻くはそれを  
かこり今も赤漆をさす是を神通巻と云トを貞  
又云神通の編矢と云物ハあるは射のろも入るなり

○或後云  
シニツウノカラ  
ラハ神氏ノ  
能ハ神氏ノ  
能ハ神氏ノ  
古傳書よそそ是ハ田村義成と云古事物語は神通地  
シニツウトヨムナリ同ナシカブラトテ目ヲクリアケサルカブラト云そ又アマナリナリ





之と云はれあり 宝志ト云みよと云りあり 此は説用へらる

こはあこと二人の眼の建目の中のひとみの事、的の黒み

もそれと似れ、こはあこと云はれ、只目あての爲、よ書中、

たるが自然、眼よ似、さし、虫尤、眼をこす、ま、さる

よ、あらし、又い、さる、座人、よ、せ、よ、あ、三、す、や、の、大、さ、る、眼、あ、こ、ら、い

一、弓の、印、竹、内、竹、箭、竹、ト、云、り、射、る、時、的、的、の、方、向、を、バ、外

竹、と、云、れ、竹、と、云、い、さ、る、竹、の、箭、向、を、云、内、竹、の、事、

一、弦、の、糸、一、條、一、張、一、桶、の、事、物、糸、の、部、を、記、す、

一、志、中、り、し、ま、中、の、矢、と、云、い、の、白、羽、と、黒、羽、を、つ、ま、合、せ、て、中

黒、又、ハ、中、白、又、ハ、つ、ま、黒、又、ハ、つ、ま、白、を、の、め、く、と、事、之、白

黒、の、志、中、り、を、さ、る、ゆ、へ、志、中、り、を、中、と、云、

井露寺定武々々ノ

秀々草紙ニキリ羽

黒羽ニテハキニセ侍ル

ト申侍々

マ、コレ

證拠ニシキリハ

ラ、侍、リ、テ、シ、キ、リ

ハ、キ、ト、云、ラ、後、ニ

コ、シ、ラ、ハ、カ、タ、ル、コ

史木抄 五月廿九

志、中、り、の、事、マ、シ、マ、

お、ち、る、矢、ハ、ハ、キ、

す、く、る

ゆ、み、あ、と、も、書、し、

保、安、元、曆、記、ニ、執、柄、供、奉、外、幸、ノ、時、府、生、番、長、平、藤、左、冠、鳥、羽、右、前、藤、羽、コ、シ、新、羽、右、藤、羽

ヲ、以、テ、三、府、ニ、切、續、タ、リ、ス、此、文、軍、策、考、ノ、又、之、ク、リ、ク、三、府、ニ、切、ワ、キ、タ、ル、ト、ハ、シ、キ、リ、羽、ニ

一、ふ、く、ら、し、む、と、云、本、を、一、本、と、云、ん、と、云、作、る、事、を、忠、實

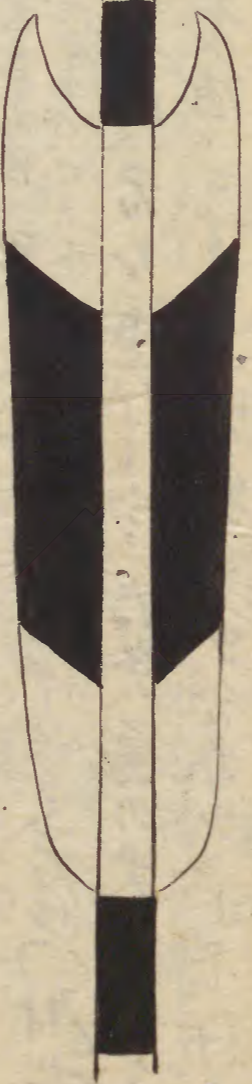
書、ま、る、と、云、ら、り、ふ、く、ら、し、む、ハ、ヒ、サ、キ、と、云、本、と、云、す、

ヒ、サ、キ、ニ、似、タ、ル、也、

ヲ、大、ニ、テ、ア、フ、ヒ、サ、カ、中、と、り、さ、る、大、和、本、系、の、云、給、ヒ、サ

レ、ハ、フ、ク、レ、ル、ユ、ハ、フ、ク、ラ、シ、バ、ト、云、ん、

サ、キ、順、の、和、名、抄、り



ゆ、白、羽、と、黒、羽、ト、二、本、を、つ、ま、合、せ、て、白、黒、の、志、中、り

を、さ、る、と、云、い、さ、る、藤、の、羽、の、文、の、ゆ、く、も、志、中、り、を、さ、る

羽、の、矢、ハ、古、く、さ、る、の、ゆ、い、ら、れ、る、古、書、又、云、ら、り

一、ト、限、矯、又、支、切、矯

ア、シ

一、ト、限、矯、又、支、切、矯

ア、シ

一、ト、限、矯、又、支、切、矯

ア、シ

一、ト、限、矯、又、支、切、矯

ア、シ

一、ト、限、矯、又、支、切、矯

ア、シ

一、ト、限、矯、又、支、切、矯

ア、シ

一、ト、限、矯、又、支、切、矯

ア、シ

一、ト、限、矯、又、支、切、矯

ア、シ



を削りのけて新井<sup>二</sup>紀四<sup>一</sup>節一宗長と書付きて又東鑑  
 は篇口巻の上注<sup>ス</sup>流に三節<sup>ス</sup>為系<sup>ス</sup>経俊<sup>ス</sup>又太平記の相  
 模<sup>ス</sup>本<sup>ス</sup>位<sup>ス</sup>人<sup>ス</sup>本<sup>ス</sup>間<sup>ス</sup>孫<sup>ス</sup>四<sup>ス</sup>節<sup>ス</sup>重<sup>ス</sup>氏<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>少<sup>ス</sup>方<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>先<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>書<sup>ス</sup>り<sup>ス</sup>る  
 云<sup>ス</sup>り<sup>ス</sup>馬<sup>ス</sup>故<sup>ス</sup>実<sup>ス</sup>云<sup>ス</sup>矢<sup>ス</sup>平<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>り<sup>ス</sup>上<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>書<sup>ス</sup>は<sup>ス</sup>平<sup>ス</sup>人<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>故  
 云<sup>ス</sup>り<sup>ス</sup>あ<sup>ス</sup>つ<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>り<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>節<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>造<sup>ス</sup>書<sup>ス</sup>ハ<sup>ス</sup>賞<sup>ス</sup>歟<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>それ<sup>ス</sup>より<sup>ス</sup>賞<sup>ス</sup>歟  
 ハ<sup>ス</sup>さ<sup>ス</sup>け<sup>ス</sup>所<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>造<sup>ス</sup>書<sup>ス</sup>ハ<sup>ス</sup>あ<sup>ス</sup>つ<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>り<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>節<sup>ス</sup>を<sup>ス</sup>け<sup>ス</sup>所<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>造<sup>ス</sup>書  
 書<sup>ス</sup>時<sup>ス</sup>ハ<sup>ス</sup>走<sup>ス</sup>羽<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>造<sup>ス</sup>り<sup>ス</sup>て<sup>ス</sup>方<sup>ス</sup>も<sup>ス</sup>書<sup>ス</sup>へ<sup>ス</sup>し<sup>ス</sup>惣<sup>ス</sup>別<sup>ス</sup>名<sup>ス</sup>集<sup>ス</sup>斗<sup>ス</sup>り<sup>ス</sup>物<sup>ス</sup>  
 尚<sup>ス</sup>世<sup>ス</sup>ハ<sup>ス</sup>四<sup>ス</sup>節<sup>ス</sup>至<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>名<sup>ス</sup>集<sup>ス</sup>官<sup>ス</sup>に<sup>ス</sup>れ<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>内<sup>ス</sup>注<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>我<sup>ス</sup>名<sup>ス</sup>集<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>云<sup>ス</sup>り<sup>ス</sup>  
 本<sup>ス</sup>式<sup>ス</sup>ハ<sup>ス</sup>い<sup>ス</sup>ち<sup>ス</sup>書<sup>ス</sup>く<sup>ス</sup>も<sup>ス</sup>真<sup>ス</sup>鏡<sup>ス</sup>大<sup>ス</sup>造<sup>ス</sup>物<sup>ス</sup>記<sup>ス</sup>云<sup>ス</sup>大<sup>ス</sup>射<sup>ス</sup>ら<sup>ス</sup>は<sup>ス</sup>矢<sup>ス</sup>  
 平<sup>ス</sup>を<sup>ス</sup>さ<sup>ス</sup>へ<sup>ス</sup>し<sup>ス</sup>矢<sup>ス</sup>を<sup>ス</sup>同<sup>ス</sup>入<sup>ス</sup>時<sup>ス</sup>入<sup>ス</sup>る<sup>ス</sup>羽<sup>ス</sup>申<sup>ス</sup>あ<sup>ス</sup>つ<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>り<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>所  
 云<sup>ス</sup>け<sup>ス</sup>所<sup>ス</sup>ハ<sup>ス</sup>ま<sup>ス</sup>さ<sup>ス</sup>る<sup>ス</sup>羽<sup>ス</sup>申<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>外<sup>ス</sup>ハ<sup>ス</sup>同<sup>ス</sup>ま<sup>ス</sup>さ<sup>ス</sup>る<sup>ス</sup>射<sup>ス</sup>物<sup>ス</sup>す<sup>ス</sup>し<sup>ス</sup>  
 何<sup>ス</sup>れ<sup>ス</sup>も<sup>ス</sup>射<sup>ス</sup>る<sup>ス</sup>矢<sup>ス</sup>は<sup>ス</sup>あ<sup>ス</sup>い<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>ん<sup>ス</sup>物<sup>ス</sup>を<sup>ス</sup>さ<sup>ス</sup>へ<sup>ス</sup>し<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>れ<sup>ス</sup>も<sup>ス</sup>あ<sup>ス</sup>ら<sup>ス</sup>  
 編<sup>ス</sup>あ<sup>ス</sup>る<sup>ス</sup>抽<sup>ス</sup>を<sup>ス</sup>能<sup>ス</sup>手<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>あ<sup>ス</sup>る<sup>ス</sup>人<sup>ス</sup>三<sup>ス</sup>月<sup>ス</sup>ハ<sup>ス</sup>成<sup>ス</sup>の時<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>  
 付<sup>ス</sup>り<sup>ス</sup>め<sup>ス</sup>い<sup>ス</sup>よ<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>故<sup>ス</sup>云<sup>ス</sup>て<sup>ス</sup>貞<sup>ス</sup>丈<sup>ス</sup>按<sup>ス</sup>矢<sup>ス</sup>平<sup>ス</sup>書<sup>ス</sup>ハ<sup>ス</sup>羽<sup>ス</sup>申<sup>ス</sup>あ<sup>ス</sup>つ<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>り  
 の<sup>ス</sup>節<sup>ス</sup>を<sup>ス</sup>け<sup>ス</sup>所<sup>ス</sup>也<sup>ス</sup>書<sup>ス</sup>く<sup>ス</sup>ハ<sup>ス</sup>燒<sup>ス</sup>繪<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>ゆ<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>さ<sup>ス</sup>る<sup>ス</sup>う<sup>ス</sup>ら<sup>ス</sup>  
 め<sup>ス</sup>て<sup>ス</sup>書<sup>ス</sup>く<sup>ス</sup>墨<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>も<sup>ス</sup>か<sup>ス</sup>く<sup>ス</sup>少<sup>ス</sup>方<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>先<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>も<sup>ス</sup>書<sup>ス</sup>く<sup>ス</sup>又<sup>ス</sup>書<sup>ス</sup>所  
 羽<sup>ス</sup>平<sup>ス</sup>一<sup>ス</sup>寸<sup>ス</sup>斗<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>け<sup>ス</sup>て<sup>ス</sup>も<sup>ス</sup>書<sup>ス</sup>當<sup>ス</sup>卷<sup>ス</sup>より<sup>ス</sup>上<sup>ス</sup>も<sup>ス</sup>書<sup>ス</sup>く<sup>ス</sup>又<sup>ス</sup>西<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>至  
 の<sup>ス</sup>官<sup>ス</sup>名<sup>ス</sup>字<sup>ス</sup>そ<sup>ス</sup>れ<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>内<sup>ス</sup>注<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>書<sup>ス</sup>く<sup>ス</sup>ハ<sup>ス</sup>こ<sup>ス</sup>ら<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>云<sup>ス</sup>ハ<sup>ス</sup>的<sup>ス</sup>矢<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>  
 常<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>射<sup>ス</sup>る<sup>ス</sup>矢<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>ゆ<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>是<sup>ス</sup>ハ<sup>ス</sup>名<sup>ス</sup>集<sup>ス</sup>斗<sup>ス</sup>書<sup>ス</sup>し<sup>ス</sup>軍<sup>ス</sup>陣<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>征<sup>ス</sup>矢<sup>ス</sup>は  
 ハ<sup>ス</sup>四<sup>ス</sup>節<sup>ス</sup>至<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>名<sup>ス</sup>字<sup>ス</sup>斗<sup>ス</sup>書<sup>ス</sup>事<sup>ス</sup>苦<sup>ス</sup>く<sup>ス</sup>は<sup>ス</sup>い<sup>ス</sup>ち<sup>ス</sup>中<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>故<sup>ス</sup>ハ<sup>ス</sup>故<sup>ス</sup>り  
 知<sup>ス</sup>ら<sup>ス</sup>せん<sup>ス</sup>存<sup>ス</sup>く<sup>ス</sup>大<sup>ス</sup>造<sup>ス</sup>物<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>時<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>矢<sup>ス</sup>志<sup>ス</sup>り<sup>ス</sup>は<sup>ス</sup>故<sup>ス</sup>を<sup>ス</sup>書<sup>ス</sup>る  
 ハ<sup>ス</sup>人<sup>ス</sup>馬<sup>ス</sup>ノ<sup>ス</sup>名<sup>ス</sup>集<sup>ス</sup>を<sup>ス</sup>さ<sup>ス</sup>へ<sup>ス</sup>し<sup>ス</sup>中<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>故<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>そ<sup>ス</sup>故<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>ハ<sup>ス</sup>故<sup>ス</sup>の  
 定<sup>ス</sup>故<sup>ス</sup>を<sup>ス</sup>さ<sup>ス</sup>へ<sup>ス</sup>し<sup>ス</sup>何<sup>ス</sup>れ<sup>ス</sup>も<sup>ス</sup>心<sup>ス</sup>算<sup>ス</sup>を<sup>ス</sup>繕<sup>ス</sup>う<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>  
 一<sup>ス</sup>後<sup>ス</sup>之<sup>ス</sup>年<sup>ス</sup>の<sup>ス</sup>條<sup>ス</sup>より<sup>ス</sup>い<sup>ス</sup>ち<sup>ス</sup>云<sup>ス</sup>ら<sup>ス</sup>ハ<sup>ス</sup>九<sup>ス</sup>本<sup>ス</sup>ら<sup>ス</sup>欽<sup>ス</sup>升<sup>ス</sup>を<sup>ス</sup>令<sup>ス</sup>せ<sup>ス</sup>し<sup>ス</sup>ら<sup>ス</sup>は<sup>ス</sup>

成ノ時入レ  
 トハ大ノ時  
 射レト云  
 三ノ中  
 三ノ中





黄なる多し又馬車に備へたるの軍あるよし傳へるも修て豹羽  
とも云へり此等皆見推意の候へ定ありし

一 海軍の矢と云矢を是備へし又見守る矢也  
海軍の矢 延喜式の兵庫寮式云箭四具一具魚大伊多郡岐  
一具箭細伊多郡波一具木大伊多郡波一具麻麻波各  
廿四隻為一具具別切五十八とあり又職十二兩二分熟  
洞三分 之上麻之波藤 神用寮表物 同書より之より麻之波箭三件多郡波  
ト一所に載しるを以て考れば海軍の矢ハ征矢の類に  
ハ似ずして殊又ハ朝舟の矢尻を作たる的矢也  
海軍の矢と云射る也

一 海軍の矢と云らあり源頼朝傳名抄に細射の二字と  
出でて唐令の内函簿令の細射弓箭ト云文ありて今按此  
萬之岐由義ト名ラると傳へり又江家次身ハ真卷弓矢  
と記しり又宇治拾遺物語に門部の府生と云舎人  
常々海軍の矢を好むよく使し事ありしとあり又古事記に  
中ノ院又たよ六の能あり身一和身身二双六身三末之末  
身四舞由身五筆身六職者之と自存せられしものなり  
又園大曆王或人真卷弓といふいふ物も或ハ少弓も  
いひ或ハ大弓ともいひ傳りしと申すに相違なむ  
世に之より亦ハ真弓に最の標を考ふればかくし  
也也代りハ紙を以て最標より之と考ふべし  
世に之より亦ハ真弓に最の標を考ふればかくし  
新井篁後も源義家海軍の事 考ふべし  
真卷或ハ真標との中ハ附字ハ字書ハ把中と記し和訓



るりあるをさへ是合せあをさるるは川をあすんて又繕の  
字を繕とよむ之繕母を繕母繕を繕とよむ子とよむ真  
乃の繕橋を繕とよむと書て繕とよむと書と繕を繕とよむ  
たつらある又繕木らと書て繕とよむと書と繕とよむと書  
抄は細射の字を繕とよむ又由乃とよむ事ハ細の字ハ  
對するの細とよむ丸木らとよむと書て繕とよむと書  
して木と繕と合せとよむのこつら一抄細密あるをさへ  
嵩とよむ由乃ハ細射の二字を繕とよむと書て繕とよむと書  
たつ麻とよむ繕とよむ由乃ハとよむと書て繕とよむと書  
は麻とよむ繕とよむ由乃ハとよむと書て繕とよむと書  
繕とよむとよむと書て繕とよむと書と繕とよむと書  
して繕とよむと書と繕とよむと書と繕とよむと書  
弓矢成へし延壽武とよむと書て繕とよむと書と繕とよむと書  
弓作之事科ハ入事の物系組泉添角草ホのりらとよむ  
たれとよむ竹の事縹の事とよむと書と繕とよむと書  
繕とよむとよむと書と繕とよむと書と繕とよむと書  
き矢あつた繕とよむと書と繕とよむと書と繕とよむと書

一 白鳥の羽シラトリを繕とよむと書と繕とよむと書と繕とよむと書  
事ハ白鳥の羽とよむと書と繕とよむと書と繕とよむと書  
羽とよむと書と繕とよむと書と繕とよむと書と繕とよむと書  
これハ白鳥の羽を繕とよむと書と繕とよむと書と繕とよむと書

一 漆羽の矢シラトリを繕とよむと書と繕とよむと書と繕とよむと書  
繕とよむと書と繕とよむと書と繕とよむと書と繕とよむと書  
と繕とよむと書と繕とよむと書と繕とよむと書と繕とよむと書



義絶の位あれ一不天まのさみうとあらんううう  
毎一をのあまおの甲曹を正法れい守りとあり  
てあく處をよせぬういあるなるぞとして小様おとりの  
鑑四方白の甲山香の羽の矢十六さして丸木ら一法  
そつておくれうしせうしそ、貞平の云を以せ上二條の  
丸木らを用ひとて、きうらとむうりいふへきよ丸木ら  
とこととらうころをらんれい、義絶記の言えんいふへきよ丸木ら  
たうらき一をそれよ法きれぬあり丸木らとその名を  
さして記したるおぬい

一ある人の不持したる丸木らなる一りをそ新持のやく  
丸くあまうりの不まそとて、ゆ寸九分せり丸サまて上  
のをすの方へ移うるどをそと細き木の極りゆ寸せり  
也但おののまの長サ六尺六寸四分、熱神馬原のゆきりの  
ところを四角まぬり、殊して木地をうて年号月日

康正の  
後花園  
二年号  
お筆義絶  
ノ時代

康正元年  
乙亥七月

ゆびわの先を細くなりたり木の何の木  
とも知絶一櫻の木のやくんころ  
のハスカムラノ不ガシナリ完ヤナリ

一ふきよせ後のらの事、我物傳云巻の八結絶を射トセシ条康正三から  
ゆきしりりれこれいふとみるあまうの祐絶こ我あつま  
くひておとりりれその日の装束花やうありふせんをう  
のむこれ一太きころ此むうもきまうりあのみあひあき  
よせそうのらのまん申とりき、志げ後のを志げく  
巻く後の名こふきよせ後のを一つ押寄巻く  
一まらむこの羽いまらう後の羽こまらハ蜂こまらハ食こ





北条隆興云

列以下群糸弓二張 假令如常但頗短 似夷弓以皮為弦 とあり又糸考太平記

直冬上 云足利直冬ハ大内奮跡大橋殿の額門の跡は皮

布で糸一少少は程弓行矢をて龍湯は拵せられ糸身

ハ黒草腹巻に夷弓拵て糸鞋は草皮を拵せらるト

あり右夷弓詳解ふに拵るは物て日本の卯の國こを

夷と云之唐の弓を夷弓と云ぬし古日本へも唐の

弓渡り来りしを忽びすらと云おつらるぬ

唐の弓ハ短き物あれハ東證も頗短似夷弓と書

ぬし 今外解の内也 鹿 一竹箠た古き物く為我物竹巻三よと云矢さうら竹箠

一本海弓の事流儀の部よと云る

一糸裏の弓と云は是も軍弓也弓の竹の上皮をこそけく

ぬとき針不とのふとさの麻のより糸よてうらますより

本をきてをさては後あく巻中つめる也糸の下ハ麦漆を

付く巻也 麦漆ハセーぬらる 熱射を右のゆく巻て糸の上

をせーぬらるる一よてさうとぬり 蝕うらうてうれいと云

麻の手れぬとよてぬくいてつやをぬきこ其上をより粘

うる一ぬくぬり蝕うじて後後を巻く之後ハ束弭本

弭よせんぬん巻うらふ後日輪巻月輪巻ありし せんぬん

字ハ後弓巻ハぬらるを云く 後ハせんぬん巻の上の方ニ換ハ一文字ニ巻か

さぬらと云日輪巻ハせんぬん巻の下ニ換ハ一文字ニ巻重ぬら云之右うら

の字也本ハ弓の方ハ日輪巻ト云名の知る事也月輪巻の次せん

ぬん巻を次うら後之後の本弭ハ短くすく

尾さうりの後日輪た、木の後をも巻く 矢守りハ弓のりの上の

下のハ介のけさやう後ハ裁不と心まをぬく 尾さうりの上 五ふも七





むつりし備新の入ル位に皆逆代の作りしもの矢張りその後いふ事り  
の上の後の射る時矢よすれらる矢をりりとの後と云の墓目とてそのの  
後いふ事りりの下の後之是は笠物大逆物あるに墓目ニテ射る夜墓目よ  
沙土を付らるをよきりりの下迄まで沙土を付らるをよきりりと云ひ  
めききと云之又墓目ニテ人を射倒るるもある也軍陣のらうも墓目  
ききと云之墓目ニテ人を射る事あり記云

一 突矢と云物あり物神矢の如くこつりてらるをひけす  
よ射て投つきよ突く物しきと云今之の世の離<sup>シ</sup>劍と云  
物のや一よよ持てあげつきよさる夜射るといふ事りして  
突くト云之太平記巻千五 四月十七日 云云妙親院の因幡  
の聖名全村と云三塔名卷の悪僧あり標の上は大荒目  
の禮をききて後長刀の志のきさくりよ萬籟形ある  
を振よ極み篋の太サハ尋常の人の墓目<sup>記</sup>とすす社  
ある三年<sup>注</sup>をりし付し押し割て長船打の解のあか  
敷<sup>注</sup>社あるを笠本まき中心を打海<sup>注</sup>と云し社あり  
け巻卷の上を琴の糸を以て糸<sup>注</sup>巻<sup>注</sup>と云して飛<sup>注</sup>と云し  
たらを森のやくよ負<sup>注</sup>あり<sup>注</sup>と云しとらをは持<sup>注</sup>す<sup>注</sup>是ハ自  
衛よせん<sup>注</sup>ある<sup>注</sup>り<sup>注</sup>切<sup>注</sup>卷<sup>注</sup>の面よ二玉<sup>注</sup>と云<sup>注</sup>て各<sup>注</sup>あり  
ハ先年<sup>注</sup>三井<sup>注</sup>古<sup>注</sup>の合<sup>注</sup>義<sup>注</sup>の池<sup>注</sup>布<sup>注</sup>よ<sup>注</sup>な<sup>注</sup>れて<sup>注</sup>越<sup>注</sup>後<sup>注</sup>雨<sup>注</sup>流<sup>注</sup>さ  
れ<sup>注</sup>妙<sup>注</sup>親<sup>注</sup>院<sup>注</sup>の<sup>注</sup>因<sup>注</sup>幡<sup>注</sup>全<sup>注</sup>村<sup>注</sup>と<sup>注</sup>云<sup>注</sup>ハ<sup>注</sup>我<sup>注</sup>事<sup>注</sup>之<sup>注</sup>城<sup>注</sup>中<sup>注</sup>の<sup>注</sup>之<sup>注</sup>  
よ<sup>注</sup>ハ<sup>注</sup>矢<sup>注</sup>つ<sup>注</sup>進<sup>注</sup>と<sup>注</sup>せ<sup>注</sup>り<sup>注</sup>ん<sup>注</sup>持<sup>注</sup>と<sup>注</sup>す<sup>注</sup>れ<sup>注</sup>て<sup>注</sup>出<sup>注</sup>院<sup>注</sup>と<sup>注</sup>云<sup>注</sup>す<sup>注</sup>と<sup>注</sup>云<sup>注</sup>す<sup>注</sup>と<sup>注</sup>云<sup>注</sup>す<sup>注</sup>  
上<sup>注</sup>り<sup>注</sup>し<sup>注</sup>脚<sup>注</sup>指<sup>注</sup>出<sup>注</sup>して<sup>注</sup>指<sup>注</sup>の小<sup>注</sup>間<sup>注</sup>を<sup>注</sup>自<sup>注</sup>突<sup>注</sup>よ<sup>注</sup>そ<sup>注</sup>突<sup>注</sup>り<sup>注</sup>り<sup>注</sup>  
ハ<sup>注</sup>矢<sup>注</sup>信<sup>注</sup>し<sup>注</sup>ハ<sup>注</sup>矢<sup>注</sup>留<sup>注</sup>の<sup>注</sup>陰<sup>注</sup>よ<sup>注</sup>立<sup>注</sup>り<sup>注</sup>り<sup>注</sup>る<sup>注</sup>禮<sup>注</sup>成<sup>注</sup>者<sup>注</sup>の<sup>注</sup>せん<sup>注</sup>ん  
の<sup>注</sup>板<sup>注</sup>より<sup>注</sup>後<sup>注</sup>ろ<sup>注</sup>の<sup>注</sup>総<sup>注</sup>角<sup>注</sup>付<sup>注</sup>の<sup>注</sup>金<sup>注</sup>物<sup>注</sup>あり<sup>注</sup>裏<sup>注</sup>表<sup>注</sup>二<sup>注</sup>を<sup>注</sup>と  
通<sup>注</sup>して<sup>注</sup>矢<sup>注</sup>先<sup>注</sup>二<sup>注</sup>守<sup>注</sup>斗<sup>注</sup>あり<sup>注</sup>り<sup>注</sup>り<sup>注</sup>る<sup>注</sup>所<sup>注</sup>を<sup>注</sup>無<sup>注</sup>指<sup>注</sup>が<sup>注</sup>成<sup>注</sup>て<sup>注</sup>二<sup>注</sup>云<sup>注</sup>も<sup>注</sup>い  
と<sup>注</sup>す<sup>注</sup>死<sup>注</sup>て<sup>注</sup>り<sup>注</sup>り<sup>注</sup>中<sup>注</sup>は<sup>注</sup>是<sup>注</sup>を<sup>注</sup>り<sup>注</sup>て<sup>注</sup>そ<sup>注</sup>全<sup>注</sup>村<sup>注</sup>を<sup>注</sup>自<sup>注</sup>突<sup>注</sup>の<sup>注</sup>因<sup>注</sup>幡<sup>注</sup>と<sup>注</sup>ハ<sup>注</sup>名<sup>注</sup>付

たりしこと

一 卷目より歎を射取事もあらず東鑑云 卷三十四 仁治二年九月廿二日

北条元時 左親衛自藍澤被歸救日臨山野熊猪鹿多獲之其

中熊一丸親衛以引目射取之先代未聞珍事之由諸

人一同感申云と猛き熊を引目を射殺すは是れ力

の甚強乎と云り月より皆碎けて死しし事あり

是より記しし馬の上の人を射取しし事も同く力強乎不為之

一 百矢と云り古事書あり是れは色々の矢を百餘大あり

心腹よりして供の者より負すを云ぬし太平記十七卷

山攻桑白鳥の羽をてし事あり矢の十五束二つあり

を百矢の中より只二筋ぬいては又同条

百矢二筋とせしとあり二筋といは後二筋の事あり

一 野矢征矢の事既より記す東鑑卷三十一 童野箭候

所輿右童征矢候御輿也又同卷三十四 宿老帶野矢若

輩若征矢と云は此は別あり征矢は逆頰箭黒塗箭

盛り野矢ハ狩箭 一名康 箭 一名康 射りて負しぬし 箭も野矢

と征矢と名別む事也 又東鑑卷三十三前後供奉人皆着赤帶

赤帶野矢

一 野矢の羽をきりし事少なき事原由也秀紀云御將

場の羽供と落る去路ありし出立ハ多し羽をてし事

もす 鹿 鹿 鹿の鹿筋を肩て上矢ハ四目をさす下

羽ハよりて事しらハおもひし事也云々羽ハよりて事し

と云矢の事手取を云し事しと云羽の場を討ら



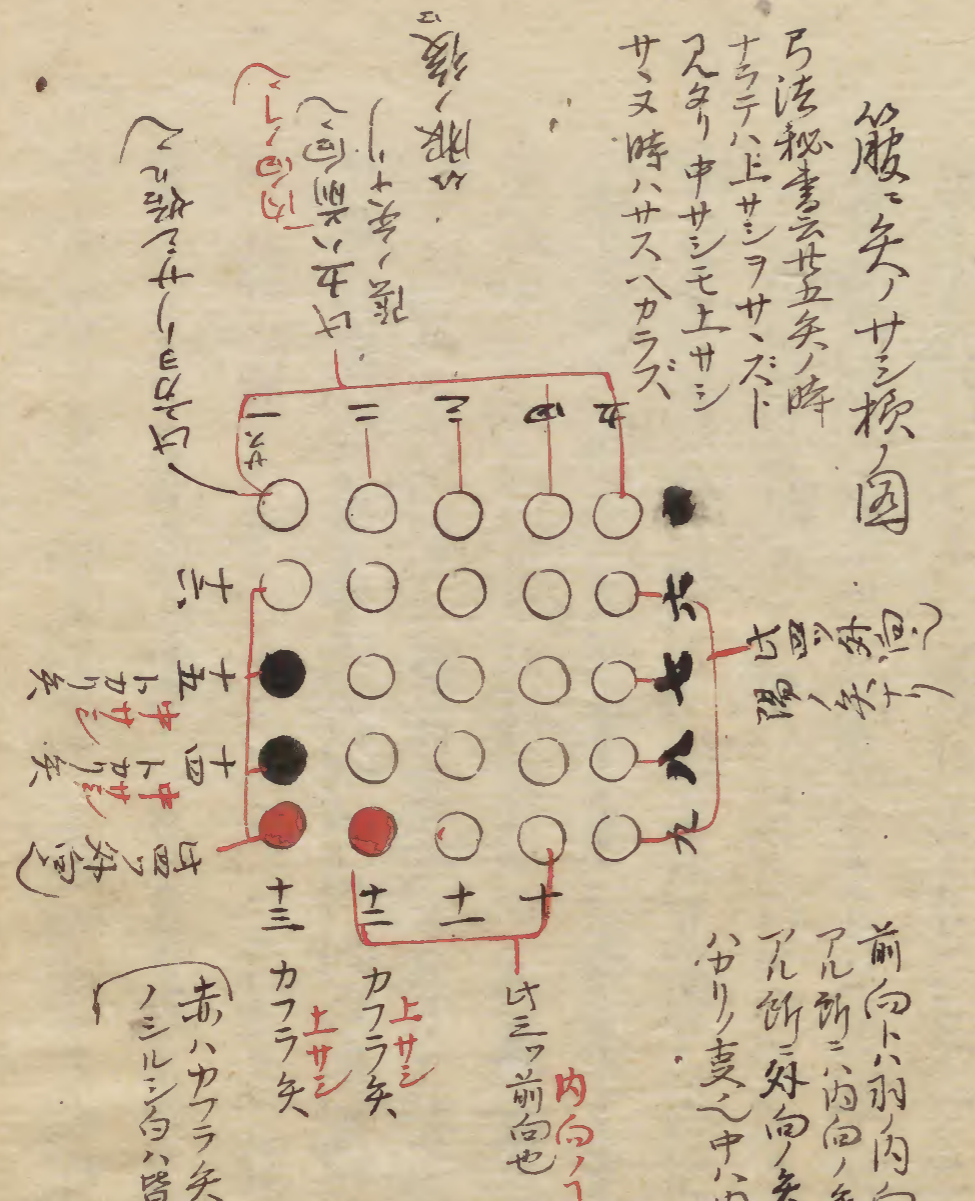




するものともいひ体の矢のふること云又ハ申さしと云ふは  
 射す事とて征矢のふこと云と云ふ何れもあやまりあり  
 用へるは右の義經記の文をよく考へんてしをちをことハ  
 ちちくはとて槍を食くはたうのふこと云の羽は鷹の羽と  
 云はくはさうの羽の事なる忠實書とさう矢ハ鷹羽也少羽ハ  
 山鳥の羽を食くこと云と云ふ義經記の申さしをちをこ  
 の羽とていふこと云は合さるさう矢ハ一鳥の羽のふこと  
 くれども佐義の事と云ふハ申さしと云ふの事云は合さし  
 一 籠ノ征矢并上サ一申さし一のさし一 籠ノ矢たのめ一 是ハ多岐  
 後考ふる所の傳へたる所の記されし將領記とてさう多岐なる  
 丸ハ少岐系系氏飛少捕持法後徳門牙とて云ふの遣人あり  
 意昭院多岐公の代官志の比の人々被よ西傳こそ籠ノ矢  
 のさしやの傳たのめと云ふ

籠ノ矢ノサシ振ノ圖

弓法秘書云廿五矢ノ時  
 上ラテハ上サシヲサノズト  
 又サリ申サシモ上サシ  
 サノ又時ハサスハカラズ



籠ノ正面

赤ハカフラス矢ノニルニ黒ハトカリ矢  
 ノニルニ白ハ皆征矢ナリ

一 弓よ巻く後ハ四字ハ藤ノ字ニ竹冠ニ云々艸冠ニて是と  
 書くハふちと云字ニふちハ弓よ巻物ニあるハ藤<sup>リシ</sup>と云  
 物ハ葎<sup>カ</sup>藤とも云々東西洋考ト云書ニ云 葎<sup>カ</sup>藤蔓抽<sup>カ</sup>被  
 地無枝葉有皮果其外如竹皮剥之則落長數丈不值  
 前刀伐可鏡救園ノ齊氏要術と云云云 葎<sup>カ</sup>藤圍殺寸  
 車於竹可以代篋以縛船及以為席勝竹ノ字ヨ果ニ云  
 竹藤蔓生似竹ノ右ノ文ノ意ハ葎<sup>カ</sup>藤ト云物ハ蔓出<sup>カ</sup>  
 地の上よ生ハ<sup>カ</sup>葎<sup>カ</sup>藤ト云物ハ皮をわたり<sup>カ</sup>竹の  
 叶<sup>カ</sup>を皮を剥けハよくまうれる<sup>カ</sup>也<sup>カ</sup>ヲ<sup>カ</sup>ヲ<sup>カ</sup>斗もあ<sup>カ</sup>  
 葎<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>ひ<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>至<sup>カ</sup>け<sup>カ</sup>ハ<sup>カ</sup>何<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>長<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>ぬ<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>殺<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>鏡<sup>カ</sup>  
 る<sup>カ</sup>とも<sup>カ</sup>ハ<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>蔓<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>ハ<sup>カ</sup>寸<sup>カ</sup>四<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>内<sup>カ</sup>外<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>  
 あり<sup>カ</sup>竹<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>重<sup>カ</sup>宝<sup>カ</sup>ノ<sup>カ</sup>竹<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>輪<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>代<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>め<sup>カ</sup>又<sup>カ</sup>船<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>つ<sup>カ</sup>め<sup>カ</sup>

カバヲ  
 一クトハ  
 カバサカラ  
 ノカワラ  
 一ク事  
 トルルハ  
 非ナリ

繩<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>あり<sup>カ</sup>又<sup>カ</sup>細<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>席<sup>カ</sup>ニ<sup>カ</sup>織<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>巻<sup>カ</sup>  
 ハ右<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>葎<sup>カ</sup>藤<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>皮<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>手<sup>カ</sup>に<sup>カ</sup>細<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>巻<sup>カ</sup>あり<sup>カ</sup>古<sup>カ</sup>書<sup>カ</sup>ニ  
 有<sup>カ</sup>ク<sup>カ</sup>葎<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>云<sup>カ</sup>ハ<sup>カ</sup>藤<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>云<sup>カ</sup>ク<sup>カ</sup>葎<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>  
 と<sup>カ</sup>云<sup>カ</sup>ク<sup>カ</sup>葎<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>云<sup>カ</sup>ク<sup>カ</sup>葎<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>云<sup>カ</sup>ク<sup>カ</sup>葎<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>  
 云<sup>カ</sup>ハ<sup>カ</sup>織<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>巻<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>糸<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>巻<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>葎<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>巻<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>あり<sup>カ</sup>  
 それ<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>織<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>ぬ<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>有<sup>カ</sup>ク<sup>カ</sup>葎<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>云<sup>カ</sup>ク<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>箇<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>葎<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>云<sup>カ</sup>ク<sup>カ</sup>  
 一 弓つ<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>矢<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>復<sup>カ</sup>秋<sup>カ</sup>ハ<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>上<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>春  
 冬<sup>カ</sup>ハ<sup>カ</sup>底<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>矢<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>復<sup>カ</sup>冬<sup>カ</sup>ハ<sup>カ</sup>上<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>復<sup>カ</sup>秋  
 ハ<sup>カ</sup>底<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>云<sup>カ</sup>事<sup>カ</sup>宿<sup>カ</sup>書<sup>カ</sup>ニ<sup>カ</sup>見<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>そ<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>細<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>記<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>  
 也<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>知<sup>カ</sup>人<sup>カ</sup>あり<sup>カ</sup>  
 一 貞<sup>カ</sup>子<sup>カ</sup>云<sup>カ</sup>カ<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>葎<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>み<sup>カ</sup>つ<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>男<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>云<sup>カ</sup>婦<sup>カ</sup>  
 も<sup>カ</sup>経<sup>カ</sup>糸<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>葎<sup>カ</sup>あり<sup>カ</sup>経<sup>カ</sup>水<sup>カ</sup>見<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>時<sup>カ</sup>葎<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>也<sup>カ</sup>





君さある後よぬるつら神と秋の五葉をとりしれ浦を流る

法少ゆえ枕をよみよさききううしきし中し物うれいさあひ

ひいふあそひのそとふとふとある急ひそめをよめさいでのを

しとされてさししのあるよありらるをんつゆいさき

一 あまのあひてしと云おのりり真羽の中よけ不阿り ま羽い  
たしおのり


詳よその文忘れずある人の云あるのあひてと云を海人の

顔と云うりと思ひて後多よ羽の文を人の顔うして目

鼻耳に取の形あしを画ししらハ安作あるへし接

するよ舞樂よ安麻ト云舞ありそ舞の面よ紙よ

▲ かげの形をを書き顔よあて、舞こあまの面の羽

と云ハ安麻の舞の面のこしとく  かげある

文あると云ぬへトトしりけ紙はよさもあるをぬく

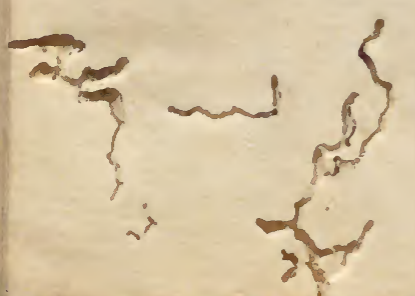
思ふとあり右のぬくある羽の文をあるまし中し物まも

あふ右の紙も推量の紙とハ云あまおのりし中し考

あり後くたよ安麻の舞の面をうけしと云くあり

後よあひいありし中しとあまし

舞人の顔よかくる假面を何のあひてト云あり





ハチモンジ  
一 八文字文



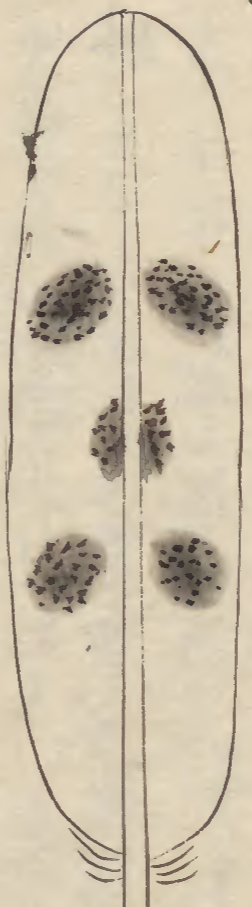
ハチクニ、クニタカノ内

文カ多ク上リ  
カタ方下ル

地白文ウス子ツ三色

堪川新興ノ云々神格云

一 あまのあひて



地白文ウス子ス三色

前云云アノ舞ノ面ニ似  
タル瓦上ノ文 是ニ似タリ  
下ノニツノ文 ▲是ニカタトル

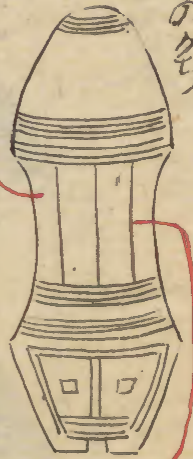
ナルヘニツハ三角ニカトル  
ナリ是ハ折糸ノ人撰夫  
へ行キ取来ル糸ヨリ  
あまの面トヤアリハ

一 笠懸門月のひりき目のり射御持長記云笠懸門月ノ  
りカツカ不を巻立音立形をかこれり色あうり根本ハ

ひりき目のり 実朝の代より今の笠懸門月ハ定々者あり  
笠懸門月書云の記笠懸門月のひりきめハ実朝の世より  
ひりきめをまめたる世よりひりきめ始るあり  
かこりありとてひりきめをまると上賢抄云門月を取  
ひりくと云り新らひりき目をかゝるひりきめてこれめ  
のあるり昔より昔よりひりきめて射るに笠懸門月云  
よ他者 笠懸門月のひりきめに申物の 巻より下を十二  
ひりきに定本をあつるよ申くがある不定本あてま  
きし物ハ定本を申くありたむるにノズハ 長束ヲりむら大升  
をこりてあまをかりせを祀物ありゆみくす

笠掛引目

のち



け不をまかぶと云  
 ひきまけ不をまかぶと云  
 形之実朝のころひきまけの  
 きてをまかぶと云  
 たぐりこれめを付る大射引目  
 定木を中よりまきむると引目の  
 らてそれを引目とて十二不  
 をひき細く引込通してこれめ  
 ひきまけの布意はけのひれ  
 ひきまけあり十二の  
 めえこれめよりきをひき  
 ひきまけとて志略めとて吉記  
 板を引こらして定木をまかぶ

のち急トハ  
 引目のその  
 まきむをまか  
 こも下の定を云



定木

板を引こらして定木をまかぶ

一 弓袋さりと云はら袋を持つ役人の名之役者の部は記

一 幕目の大小射の口の活弱よする事あれは定るす法

弓強れば大めを用ゆ弱れば小めを用ゆ射て試て大小を

定め申しし豊の長サト横のふとさの恰好つり合のり古書

も甚ゆはあり依之自ら又をつり合恰好を考へた記

きあふし幕目豊の長サ五寸あるは横のふとさ九寸あり

より豊の長サ又豊の長サ八寸あるは横のふとさ九寸あり

豊の長サ又豊の長サ八寸あるは横のふとさ九寸あり

フトサト云ハ一カフラノホ

フトサト云ハ一カフラノホ

フトサト云ハ一カフラノホ

フトサト云ハ一カフラノホ

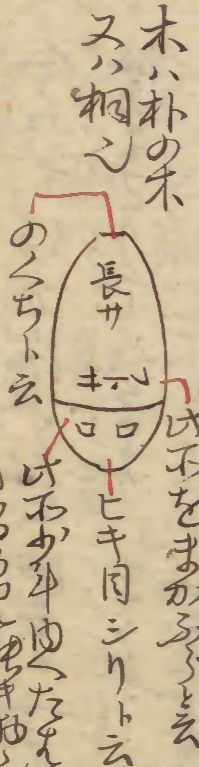
フトサト云ハ一カフラノホ

フトサト云ハ一カフラノホ

フトサト云ハ一カフラノホ

フトサト云ハ一カフラノホ

フトサト云ハ一カフラノホ



ひきまけのりの大サハまきむのさ一後一のすを五寸ありてそ二寸多を









草履 カワエビラ 射御拾遺抄シマバコに云志、草履はひふあとし略、あし逆

つふ為ひふあありりう己後と云ハあめ、まてはくみくし近

ありさうつふ後と云ハ、井の皮をうくることらん、さう草

の後と云ハ、後の方立をぬめ、皮をそつみきま

たう、その事、弓の弦を、うらあ、時、用、お、吉、ハ、さ

あ、うと云、一、諸書、南、用、抄、云、たう、同、一、の、長、サ、は、す、え、し、と

つ、え、さ、う

一、其、石、蠅、取、の、事、本、宮、院、史、書、云、角、鷹、の、羽、を、ハ、先、白、毛、

ふ、く、者、や、う、ま、く、し、是、を、む、志、や、く、花、と、云、え、又、白、毛、を

ち、ト、者、や、う、ま、羽、ど、り、た、る、を、ハ、其、石、取、も、云、あ、り、又、く、ろ

こ、を、の、こ、し、て、羽、と、り、た、る、を、蠅、取、と、云、え

一、三、掛、四、掛、の、ゆ、け、の、事、細、川、云、右、馬、方、書、云、

云、ゆ、け、を、さ、う、け、ハ、射、多、り、射、少、の、者、當、流、ハ、あ、り、又

三、つ、ゆ、け、と、一、事、ゆ、存、知、あ、く、い、あ、り、ゆ、け、布、と、云、え、ゆ

云、右、の、ゆ、け、も、右、の、ゆ、け、も、ゆ、物、あ、り、一、あ、り、が、う、し

エカケ皮  
巻スス  
ウラ巻  
水マキ細  
紫指文  
手指  
クスシ指

シ葉草ハテツクナリ、軍陣ニ巻ススヘ、細子ニ紫家ノ紋ヲ付ルニ略多ハ、名草ユウシ皮ノ

文、草履、依、こ、ヒ、モ、友、草、こ、シ、文、ト、ハ、三、地、之、ユ、コ、友、草、之、ム、ラ、サ、キ、ノ、ヒ、モ、ユ、ビ、ツ、ク、ニ、用、ル、ト、云、ハ、

一、せん、もん、巻、せん、もん、巻、二、京、の、事、せん、たん、巻、ハ、前、も、

志、げ、後、の、ら、の、本、管、束、管、の、ら、ハ、後、を、取、て、十、文、字、ハ、巻

を、せん、もん、巻、と、云、ん、せん、たん、巻、と、云、ハ、志、げ、後、の、下、地、を、巻

時、の、事、ハ、下、地、麻、糸、を、繰、を、か、一、つ、け、巻、目、二、分、志、げ、く

巻、又、一、分、を、取、て、又、二、分、巻、め、は、後、く、ま、り、終、て、上、を、う、り

よ、く、ぬ、る、ハ、梅、皮、を、た、ん、く、は、巻、目、の、上、ハ、巻、て、上、を、と、ろ、う、り

セシスルニ

慶長八年二

記サレタレ也

當流トハ小笠原ヲ云

小笠原ニ知ルナシト云

中

いろよぬる之上下矢さうなるよ白髪を法う  
せんぬん巻のらと云ハ千巻之下地ようを付て麻  
糸を巻目かろまげく巻又あかまを又あか巻たん  
ぬ麻糸を巻てせめうる一よして巻こめて上をろる  
色よぬるえお上下矢さうなる三不白髪をつらぬ種ハ夏  
を巻うべきをせんき巻のらと云く

- 一 そまのらと云ハ永正家中竹馬記云そまのらハ竹  
をハぬらん皮をぬく云く竹をぬくずしてそま本斗  
まくぬる<sup>上下矢さう</sup>三不白髪を  
二重赤漆のら<sup>カカシ</sup>云ハ同書云竹をこ記ある一木を  
麻糸をぬる一よまをるをハぬく一あうる一ト云く三竹  
をこま赤うる一よぬり木をこま赤うる一よま

ゆりて矢さうなるよ白髪をつらぬきある  
とハ漆は何とせすぬるを云あり

- 一 赤のせんけたるうら<sup>カ</sup>の事同書云空種ハ何皮  
をもぬる之但犬の皮ハ久の皮<sup>カ</sup>とハぬぬ之又京野<sup>カ</sup>  
虎豹の皮ハ久の皮<sup>カ</sup>とハぬぬ<sup>カ</sup>一孝覧あるなる一  
りせんをこまをる<sup>燕照院</sup>及古代<sup>院</sup>申諸武具を  
帯一して赤くせらるる者<sup>カ</sup>時ハ<sup>カ</sup>赤<sup>カ</sup>あり  
せんをぬる<sup>カ</sup>うら<sup>カ</sup>ハ十六矢を<sup>カ</sup>して<sup>カ</sup>あろをぬる  
を付らる<sup>カ</sup>少<sup>カ</sup>多<sup>カ</sup>種<sup>カ</sup>元<sup>カ</sup>本<sup>カ</sup>抄<sup>カ</sup>あり<sup>カ</sup>そ<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>せん  
をぬる毛皮<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>皮<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>ぬ<sup>カ</sup>ひ<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>包<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>  
也<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>せん<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>ハ<sup>カ</sup>継<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>今<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>せん<sup>カ</sup>  
事<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>赤<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>せん<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>種<sup>カ</sup>種<sup>カ</sup>ハ<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>

平人の用ひられぬ事としてあれ大空穂に熟るはくち  
かゝるはこしは強は稀の事よ用ひて武の例はあり強  
きあるべし

一 空穂の矢さし一の(と)と云ふは是ハ一候を悪妻さ  
せぬれさる由よそふり之を奇の方をよふ筋遠は指  
も明たる由より申すを指也

一 坂強の事万礼儀の次第ニ云はら強の事ハ出らぬ  
さし一由る本陣斗り作り納めて申し本陣を作ら  
すしてそ候たふと申す強と云はらぬのつらた云そは  
ハ松坂之職人よ合ニ松坂伊勢やはらぬと云何あり強より  
のぶらあり

一 強を作本日並宗急と云八十歳余宇治の老人の伝ニ云  
昔を強昔の如くうみてうせの如くよ處て水よつけり  
をうけて本儀を流る一をたるう能トお強之を強の  
昔ハ出羽の山形より出らうむと云昔強くして

一 能とらふ  
矢開ヤヒラキよ用する鳥鴨ヒエトリ鴨カモ木氣キキ鼠ネズミの事ひえとりハ  
ひよとりと志といちやう申しきねさハアサの尾の細  
きくむきといハ此の事ハ射御持長記云むよび  
ハみすくことなるハ強くむきといの事よ同く好

一 鷄ウツラ目メ樺カバの事東鑑建久元年九月十八日条候野太  
市覽之を文漆物以鷄目樺撲之ウツラ後口巻之又堀川  
親元ウツラ記せし羽秋ト云書よ云うゆめの樺よてあく  
堅矢ウツラと又矢うつゆめのけんむよてをくさす樺カバ

鷄の字  
鷄の字  
サウラ  
井はし  
色木

對して極のあま皮まてをくをうつふめの棒と云く  
焦管コカシノの事小笠敷川目の如くよ用る之管を不務こが  
したるよあらび射所拾遺抄云こく管を用ゆこが  
扱みづげの如く射の方竹を云わらハこが  
のトアしてたら管をこがけえき物よ大まておし  
こりん之云くヲシフシノ上ノ折ナリナニテ  
フシカケノ如クコカシ外ハ白クスル也

一 さまし管の事前よ記せしなや一 保りあるをきあり  
管をまうらうまてつやあくさつと居くぬりし  
ぬりしぬりうけをえる時ハまうらうまてつやあく  
まてぬるを云へし上覧抄云一 是邪  
の条 管ハさまし  
管たえしぬりうけをこりてぬりし又的矢の条ハ  
一 管たえしぬりうけ又のこい管あうれシニテ  
ウシニテサツト  
ウスルヲ云 ぬりし

也云く管的出張記云的矢の条ぬりうけ管たえらうやまてい  
的矢布式ハ白管ヒシテ 是うれシニテサツトナリ  
テ又フシカケヲトルヲ云 さまし管も不苦云く  
本石流中の書云ぬりうけの矢ぬりうけの下管さまし管たえ  
ハサハシト云えモウレシヌリテ次第くニウスク次第くよ白いある種  
サツトナリタルヲサシテヌリサハシト云へルナルヘシ  
まうらうぬりうけを云く永仁布衣記云管黒管  
のサツシ云くは文を以て黒ヌリトサハシトヌリヤウニ色アルト  
ヲ知んヘシ

一 かつ竹の事小笠敷の矢管よかつ竹の如くけつら付して  
ま市抄知事の事かつ竹の事よまてつやあくさつと居くぬりし  
管よ利多之かつ竹ハ漢竹漢竹あり一説よかつ竹幹よて矢  
うらよまて竹を管よあす友かつ竹と云きされとも  
は祝悪一 唐竹と記せし書もあれと唐の字ハ假字  
也射の方竹書よ云小笠敷川目条に管ハかつ竹の條



